



プレコストム
ス邂逅



片桐 継

静かな時間。ジャン＝アンリ・ジュニアは深々とシートにもぐり、両素足をサイドテーブルに投げ出していた。大量の情報と極度の緊張、窮屈な防護服の全てを脱いで綿のパジャマに包まることのできるひととき、こうして両手に愛用のマグを抱いてぼんやりとスクリーンを流れる星の輝きを見つめている時間が彼の一日で最も大切に平穏な時間といえた。星間戦争も終わり、小競り合いはあるものの平穏なこの時代は、同時に新たな開拓の時代の到来。代々学者の血筋を持つ彼、ジャンもその流れに身を任せて今、平凡な国語研究室の椅子から開拓船「タブレット号」のただ一人の乗務員兼船長としてここにいる。

「ジャン、あと15分でこの空域を離脱するわ。準備は大丈夫？」

「ああ、アルマ、大丈夫大丈夫、これからベッドへ行くよ」

生まれ故郷 γ (ガンマ)地球を離れて半年が過ぎ、アルマ——この船を制御するコンピュータで少々人間くさいがとても心強いパートナー——ともずいぶんと打ち解けてきたなあ、と自問自答。元々コンピュータに人格を与えるという考え方は好きではないし、良いことだとも思っていないのだが、自分がこうして独りきりの旅に出た時、なぜ彼ら彼女らが必要とされたのかが良く判った。

「マグは置いて行ってね、後で洗っておくから」

まるで姿無き同居人。実際、彼女——都合上そうしておくが——は炊事洗濯はもちろん、何かと不精なジャンの世話を事細かに焼いてくれ、その複雑な判断をいとも簡単にやってのけてくれる。

「あー、わかった」

時々それが恐ろしく鬱陶しいと思うことはあるにせよ、この船ではそんなやり取りそのものが大切なことなのだから、とジャンは短い溜息の後、マグの底に残ったカフェオレを空け、長い足を勢い良く床に下ろす。

「アルマ、先に行ってるから、後はよろしく」

吸い込まれて開く扉を心持早足で抜け、ベッド——耐ワームホール人体保護カプセル——へと向かう。今日のカフェオレもおいしかったよ、と礼も忘れずに。

「空間補填方式による航行が可能なワームホールが発見されたのは今から80年前の事です」
最初のアルマとの出会いは、そんな彼女の「宇宙航行に出るためには」講座から始まっていた。

「このワームホールの開始点と終了点は、宇宙船に対して特殊物質マイホを投射させ、座標を具象化することによって作成することができます。が、通過時、瞬間ですが、全ての分子が中性子からの干渉を受けるため、有機物質はその干渉に耐えられず、細胞が崩壊します」
つまり便利なワームホール生成法が見つかってその画期的コントロール方法も判ったが、有機物、つまり人間や動植物はそこを通ることができない。ついでに言うと、ワームホール内では全ての電気や信号も一瞬止まるということらしい。確かにこれでは使えるようで使えない。

「そこで発明されたのが干渉阻害物質ガノインです。この物質は特定の信号によって形質を変え、中性子を吸い取ることができます。ガノインは中性子を取り込んで吸着、他物質として排出する能力がありますが、再利用は利きません」

つまり、使い捨てのガノインというもので包んでワームホールを突破すれば問題ない、ということらしい。そのおかげで、ワームホールの利用はとても簡単かつ安全になった。ワームホール物質マイホも、阻害物質ガノインも発見実用化したのはユアザ社。ユアザ社はこの物質2つの特許だけで信じられない巨額の富を築き、今も大企業として君臨している。宇宙航行の担い手であると同時に、実はあの星間戦争の原因だとも言われているが噂の真相は不明だ。

「そこでガノイン補充のためのステーション、ガノインを自己生成させるための装置が配備され、今の宇宙航行が可能となりました。ようこそ、ジャン=アンリ・ジュニア。あなたはその第四次開拓船の一つ、このタブレット号と共に、新たな星を探し、新たな発見を求める旅に出ることになります」

タブレット号のパイロットルームはジャンの司令室であると同時にコンピューターアルマの居室でもある。退屈な研究室を飛び出して冗談で応募した開拓船団募集にまさか合格するとは思っていなかったし、その後の適性検査もパスしてしまい、気がつけば最新鋭の船の船長に納まってこうして王者のベッドとも言うべきワームホール航行用人体保護カプセルの前に自分がいるなんて。一年前の自分の胸倉をつかんで首がぶらんぶらんになるまでシェイクしたい気分になる。

そして帰ってきた現在、その目の前のカプセル、今では見慣れたワームホール航行用人体保護カプセル、というらしい普通のベッド、を眺めてみる。確かにカプセルというには御幣がある。ジャンはいつもそう思う。そこにあるのは透明な柔らかいカーテンに囲まれているお姫様ベッドで、

「アルマ……」

今日もそのカーテン、阻害物質ガノインでできている保護スクリーン、が可愛らしいリボン、水玉サックスブルーのリボンでまとめられていた。

「……恥ずかしいんだよ、だから……」

アルマがリボンを結ぶたび、ジャンがそれを撤去している。冴えない中年にリボンは勘弁してもらいたい。ベッドがピンクでないだけマシなのかもしれないが、選べる色もゆるふわクリームかミントブルーかベビーピンク、だったから、クリーム以外は選びようもなかったのだ。宇宙局はどういうセンスなんだよ、と思いながらいつものようにリボンを解き、スクリーンが静かに広がると優雅なベッドタイムの始まりとなる。確かにこれに宇宙服で眠るのは無粋だろうが、この薄いカーテンが人類の安全なワームホール航行を可能にしたのかと思うと化学技術の化は「化かす」の化に違いない、と彼は一人ごち、

「……次のワームホール終了地点は？」

独り言のようなジャン。

「座標特定はもう少しかかるわ。じゃ、8時間後に。おやすみなさい、ジャン」

ああ、おやすみ、と彼の声が発する直前、

ードン

船が一瞬、かしぐ。

「何？」

何かがぶつかった衝撃に似ている。

「アルマ！ 何があった！」

と叫びながら、パジャマのままでジャンは司令室へと向かう。船は静かで激しい点滅もない、が、低く轟音が続き、何かを削っているような音がする。

（削る？ 船を削っているのか？）

タブレット号はワームホール開始直前の為、マイホに船体を包まれている。本体に傷がつくことは無いだろうが、まるでカキ氷のようなその不気味な削音は断続的に続いていた。

「アルマ！」

司令室に飛び込んだのと、削音が止まったのは同時だった。

「大丈夫、船に異常ないわ、ジャン」

「何があった？」

答える変わりなのか、アルマはデスクパネルに船の様子を映し出していた。

「イジェクションカメラの映像よ」

「……！」

船に、何か張り付いていた。

（なんだ、あれは……？）

黒く、だが白い斑点の入った宇宙船。前から順に長い翼と短い翼、それに後ろに沿った翼を備えた戦闘型でその背には自己主張するかのように高く三角帆——ラティーンセイル——が立ち上がっている。

「敵……！」

海賊船、とでも言うのだろうか、だが、この空域でそんな報告は聞いたことがない。第一、マイホを少し削った所で船には何のダメージもないし、削った量も航行に差し支えるほどのものではないのだ。それとも何か別の狙いがあるのだろうか。

「アルマ、振りほどけるか？」

といいながら、指は自然と解析コマンドを叩いていた。その間も、戦闘機は張り付いたままだが、ゆっくりと帆をたたみ、大きく尾翼が左右に揺れる。

（揺れる？）

その動作はどこか、尻尾を振る犬に見える。

（尻尾？ まさか……）

首を振る。ここは宇宙だ、あんな動きの戦闘機がいてもおかしくはない。だがそれは逆に言えば……

「ジャン、解析が終了したわ。あれは……」

「生き物、宇宙生物、そうだね？ アルマ」

タブレット号に張り付いたのは戦闘機、ではなく、生物。体長は57mを超えるだろう巨大な生物。まさかの予感が当たる。

「なんなんだよ……いったい……」

「形状、動作形質からみて、元祖太陽系第三惑星の祖地球にかつて存在した生物、プレコに似て

いるわ」

どこか嬉しそうにさえ感じるアルマの口調。

「プレ……なんだそれ？」

「ナマズ目ロリカリア科アンキストルス亜科プレコストムス、略してプレコ、魚類です。淡水に生息し、吸盤口で藻類やタンパク物質をなめとって暮らしていたという記録があります」

映し出されたのは彼女のデータに記録されていたであろう古い画像。

「これがセイルフィンプレコ。形状、性質、全てにおいて一致点が多く……」

黒く、だが白い斑点の入った独特なフォルムの魚。鱗が無く鎧のような体表をしていて、エッジ鋭い胸鰭が長く横に美しい三角を描き、腹鰭は長辺三角、尾鰭が後ろにさらに長く伸びている。そして何よりも目を引くのが背鰭、高く空を貫くように大きく扇形に開く鰭は三角帆——ラティーンセイル——、まさしくセイルフィンという名前がふさわしいだろう。だが、

「ちょっとまで！」

今となっては伝説とも言える元祖太陽系第三惑星、その地上の淡水域に生存していたといわれる生物が宇宙空間に存在する、有り得ない。

「有り得ないだろ！ アルマ」

「宇宙ではあらゆる有り得ないが有り得る、と言ったはずよ、ジャン」

うっ、と言葉に詰まる。思わず逃げるようにして見るスクリーン。張り付いたままの生物。

「それにしても、幸せそうね。セイルフィンプレコは嬉しい時や興奮しているときは背びれを立てるとあるけれど」

楽しいらしいアルマ。かのプレコの背びれは素晴らしい立ち具合で、そのまま飛行を続けるタブレット号に口がしっかりと張り付いている

「なんでプレコがこの船に……」

敗北感を背負いつつ、プレコ、という単語を口にして

「いや、そもそもなんでプレコが宇宙に……」

ワームホール航行まで、あと6分を切っていた。

「無事なのかよ……あいつ……」

あいつ。スクリーンにはしっかりと船に張り付くセイルフィンがいる。残り6分を切ったワームホール航行のキャンセルは不可能で、ジャンはそのまま中性子の嵐への突入をアルマに許可した。いかな宇宙生物といえど、有機生物であるならばその突破は無理だと考えたのだ。そう、ワームホールを超えれば、プレコは振り切れるはずだった。

「しかも、食ってるのかよ……」

もぐもぐと口の辺りが動いており、またあのカキ氷の音が聞こえている。何かを削って食べているのだ。

（しかし何を？）

ワームホール脱出直後、船はまだ物質マイホに包まれている。後数分もすればそれも薄まるが。

「ジャン、あの生物……体表が……ガノインと同じ分子構成で出来ているわ」

「え？」

物質ガノイン。ユアザ社の特許物質でありその製法は明らかにされていない。だがワームホール航行に欠かせない阻害材だ。有機生物の宇宙航行を可能にした夢の物質と同じものがあの生物の身体に？

「それにね、ジャン、あのプレコ、マイホを食べてるの」

「はああ？」

パニック、と人は言う。つまり、プレコはワームホール航行を単独ででき、かつ、ワームホールが開始完了する所に現われる性質を持っている可能性が高い、ということになる。マイホもガノインも人間の作り出した物質で、自然にあるものではない。それに対応した自然生物などあるわけがない。

「……こいつら、本当に生物なのか？」

「有機生物ね」

アルマは機械らしい冷静さで即答する。

「さっき、体表のサンプルを取ったの。間違いなく有機生物よ。それも……プレコ」

プレコはもういいよ、とジャンの長い溜息。

「アルマ、マイホを切ったらどうなると思う？」

「削られるわね、船を。あの吸盤口は金属なんて簡単に削れるし、穴を開けてしまうわ」
船においてマイホは無限ともいえるエネルギー物質であり、出し続ける事に問題は無いだろう。今、切ってしまうことで危険を背負うよりは遥かにマシな選択のはず、ではあるのだが、

「……なんでプレコがここに……」

のしかかる敗北感。

「そのまま連れて行きましょう、ジャン」

一方で嬉しいらしいアルマの明るい声。

「おいっ！」

「今マイホを切れば船はとても危険よ。マイホを放射し続けるしかないわ。マイホが出ている限り、プレコはここを離れない」

「マイホを切って全速で振り切れないのか？」

契約規定でこの船の武器使用は自衛以外には使えない。つまり、相手が攻撃を仕掛けてこない限りこちらから攻撃してはならないのだ。今プレコは張り付いているだけだ。この状況からしてまだ武器は許可できない。始末書に追われるのもごめんだ。

「プレコの予想潜行最高速度はこの船の速度を遥かに上回っているの。それに……」

「それに？」

何かを知ってしまったらしいアルマは少し口ごもるようにして

「セイルフィンプレコはとても攻撃的な性質も持ち合わせているわ。怒らせてしまったらこの船なんて……」

船長は頭を抱える。怒らせたと判ってから迎撃して何の意味があるのか……。

「ぷれこ～、なんでこんな生き物がいるんだあっ！」

確かにタブレット号が向かった先は未知の領域。有り得ないことも有り得るのだろう。だが、わずか半年で荷物を抱えてしまった。巨大生物、セイルフィンプレコを。

「でもジャン、見て。良く見ると可愛いわ」

スクリーン一面を埋めるプレコの正面。半円を上からつぶしたような扁平な顔の両側に円らな瞳。中央には申し訳なさげに鼻の穴があり、

「……可愛いのか……これが……」

コンピューターに可愛いといわせる何かがこの生き物にはあるらしい。いや、そもそも、こんな感情的なアルマを見たのも初めてで、ジャンはひたすら不安に染まる。

故郷の星を離れて半年。毎日の睡眠のように行ってきた8時間のワームホール航行の果て、ここはどこなのだろう。開拓船タブレット号は今日も行く。その船体を上回る大きさの巨大生物を伴ったまま……

宇宙、それは最後のフロンティア……